東院地区の調査
―第503次

調査の概要　平城宮東院地区ではこれまで南半部および西辺部を中心として発掘調査を進めており、特に2006年度からは、東院地区西辺部の重点的な発掘調査を継続している。2012年度もこの方針のもとに、西辺部から中枢部にかけての遺構の様相を引き続きあきらかにし、東院地区全体の空間利用の変遷をあきらかにすることを調査目的として、第423次調査区（『紀要2008』）の北、第446次調査区（『紀要2011』）の東に調査区を設定した。調査面積は東西29m、南北35mの1,015㎡で、うち832㎡を新たに調査した。調査は2012年12月17日に開始し、５月22日に終了した。詳細は『紀要2014』において報告することとし、ここでは概要を報告する。

調査の成果　今回の調査区では複数の時期にわたる遺構を検出した。このうち、奈良時代の遺構は、掘立柱建物、掘立柱塀、溝、土坑のほか平瓦を外装とする壇状遺構がある。これらの各遺構は重複関係と周辺の調査成果を併せて６時期に区分できる。

今回の調査では、南の第401・423次調査区で検出した長大な南北棟建物SB18936が、東へ折れる回廊であることがあきらかになった。これにより、奈良時代末期にあたる６期の東院中枢部が回廊に区画されていたことがあきらかになり、その北西隅を確認したこととなる。

この回廊は掘立柱の単廊形式で梁行20尺（約６m）の規模である。同様の建物は東院３期（４期まで及ぶ可能性がある）の回廊SC19112・19113がある。また、東院５期の回廊SC19050も梁行10尺（約３m）であるが、掘立柱の単廊形式をとる。これらから、東院地区の中枢部では、３期以降、規模や位置を変えながら、掘立柱の単廊形式の回廊で区画する施設が建てられていたことがあきらかになった。

今回の調査では、東院地区西辺部と、回廊に囲まれる中枢部との空間利用の違いが判明し、両者の規模や配置が時期により変化していることがあきらかになった。これらの成果は、東院地区全体の空間利用の実態を解明する上で重要な手がかりとなる。　**（小田裕樹）**

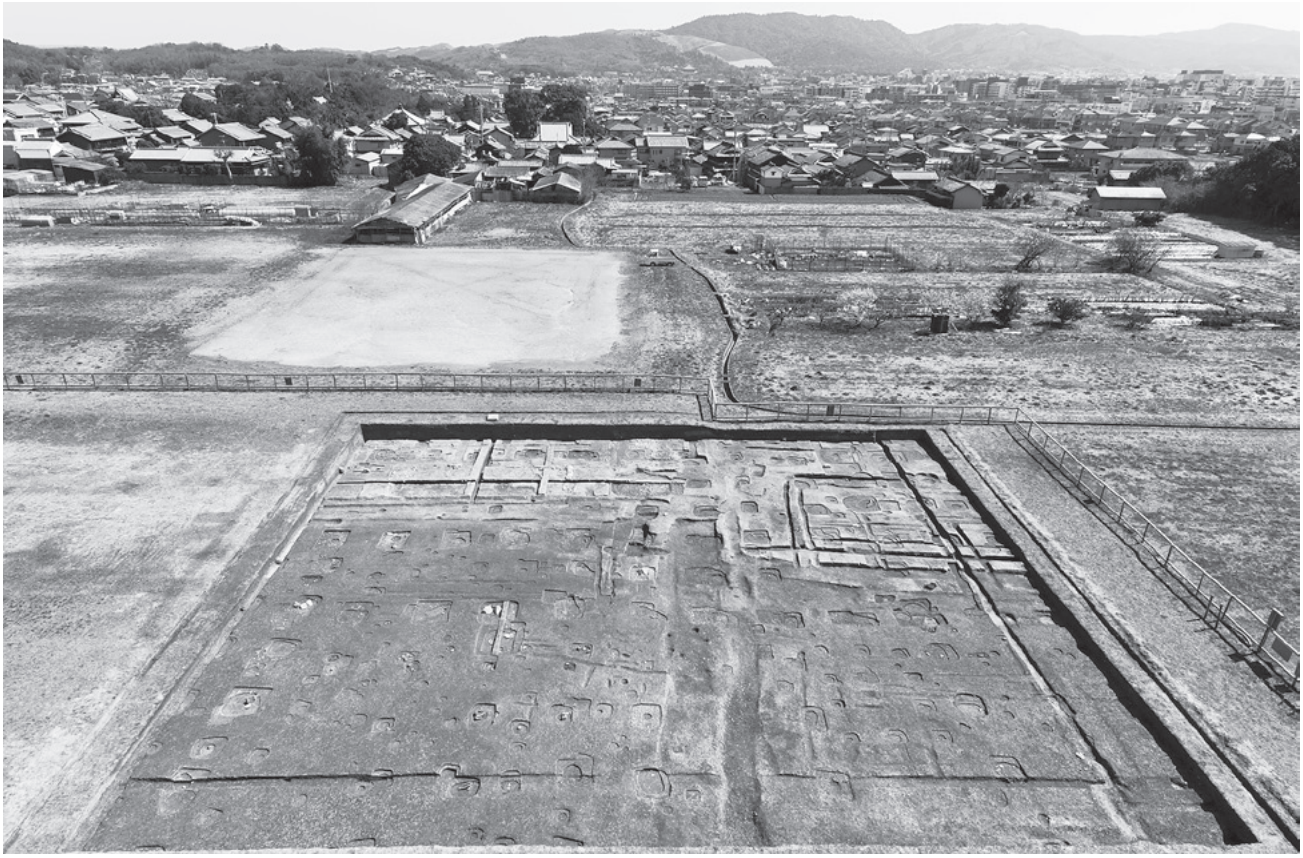

図185　調査区全景（西から）